

令和元年6月9日現在

機関番号：11301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：15K13171

研究課題名（和文）博物館経験と意味構成のプロセスの解明を通じた効果的な学習支援法の開発に関する研究

研究課題名（英文）Developing the effective support methods through exploring the meaning making process in Art Museum

研究代表者

高橋 満 (TAKAHASHI, Mitsuru)

東北大学・教育学研究科・教授

研究者番号：70171527

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：欧米での博物館教育実践では、従来の「知識の伝達」から、「来館者とのつながり」を重視しつつ、来館者が能動的に経験をとおして意味を構成するプロセスとして学びはとらえられている。しかし、博物館の教育的役割の転換に関する実証的・理論的知見を踏まえたものとなっていない。とりわけ、博物館の学習機会としての特殊性や、学習者である来館者が博物館経験をとおして、何を、どのように学んでいるのかは明らかでない。本研究では、構成主義の学習論的立場から、博物館経験をとおした意味構成のプロセスを明らかにし、これを踏まえた博物館教育論を構築し、効果的な学習支援のモデル・方法を提案することを目的とする。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、学習のプロセスのミクロな分析手法をいっつつ、1) 来館者たちが、博物館において、どのように学ぶのか。何を学ぶのか。2) その博物館経験が、その後の来館者の学習行動にどのような影響をもつのか、という諸点を明らかにしてきた。本研究は、社会学的なミクロな学習過程の分析をもとに、申請者がこれまで検討してきた構成主義的学習論の知見とも総合しつつ、新しい博物館教育論を提示した。ここで得られた知見は、ノンフォーマルな学び、インフォーマルな学びのプロセスと意義を明らかにする、より大きな教育研究の課題に寄与するところも大きい。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to examine how museum visitors in general respond to the exhibits they saw, and how survivors of the Great East Japan earthquake in particular constructed meaning when visiting museums, as well as to set forth the possibilities inherent to museum education. All of the visitors were survivors of the Great East Japan Earthquake, although the degree to which they were impacted by the disaster varied.

The survey results showed that while these museum visitors gathered information from curators and captions and adhered to interpretive framework, they synthesized this information with their own impressions of the exhibited items, constructing unique understandings of the exhibit and their own museum experiences. Furthermore, by communicating a “paean to life,” the Jakuchu exhibit affected the visitors on an emotional level and served to support their recovery from the disaster.

研究分野：教育学

キーワード：美術館教育 意味構成 来館者 構成主義 学習プロセス

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の学術的背景 伝統的には、博物館で行われる教育活動は、学芸員の専門性が確立していなかったために、学校教育を模して知識伝達型の教育方法がとられてきた(Hein 2008)。博物館において、学習者である来館者をより意識した教育が行われるようになるのは、「専門化した教育的な活動(specialized educational work)」以後のことであり、この教育職の専門職化により、従来の「伝達アプローチ」をとる学校教育の型を博物館に 適応することの問題が指摘され始めた指摘される(Hooper-Greenhill 2001)。しかし、日本では教育普及専門職員の配置はまだ始まったばかりの段階である。

(2) したがって、新しい博物館教育論が求められている。そもそも博物館は学習機会としては特殊性をもつ。第1に、J.Falkが指摘するように、学習者から見れば博物館は「自由選択」できる学習機会(“free choice setting”, Falk and Dierking 2000, 2003)である。「一期一会」、つまり、人生のなかでの唯一の機会かもしれない。比較的長期の関係性をつくりつつ教育をする学校の教育理論をそのまま適用することはできない。第2に、学習のプロセスをめぐる特徴である。学校教育は教師主導的な学習(teacher directed learning)、成人教育・生涯学習では学習者主導的な学習(learner directed learning)といわれるのに対して、博物館では事物主導的な学習(object directed learning)とでも表現できる性質を持つ。学習者は博物館の展示物を見る経験をとおして学ぶのである。そこにどのようなプロセスがあるのか。第3に、近年の学習論の認識論的な転換という理論的な文脈を踏まえる必要がある。Hein(Hein 2008)は、博物館に適用されてきた学習論を4つに類型化しているが(解説的、行動主義的、発見的、構成主義的学習)、能動的な学習者の参加経験のなかで意味を構成する主体として構成主義は理解する。(3) 日本の博物館研究では、この構成主義の受容はまだ初歩的な紹介のレベルにとどまり、十分な理論的検討も、ましてや、博物館の展示や教育的事業方法に活かされているとはいえない現状にある。以上の博物館の特性を踏まえた教育理論の確立と学習支援の方法を明らかにすることが求められる。

## 2. 研究の目的

(1) 成人教育研究の焦点は、人びとの学びのプロセスを明らかにすることにある、とわたくしたちは考える。しかし、日本の博物館ではハンズオンの展示やワークショップなどの手法が使われるものの、日本の博物館研究では階層的視点をもつ研究は皆無であり、かつ、学習のプロセスを解明しようという研究も見られない。博物館教育論における構成主義的アプローチへの認識論的転換の意味がまだ十分理解されていない状況にある(高橋 2009)。本研究は、社会文化アプローチから博物館教育研究の焦点の一つである学習のプロセスをめぐる問いに答えようとするものである。

(2) 本研究では、Hooper-Greenhillの「解釈戦略」の枠組みを使いながら、まず、来館者たちが、展示作品との相互作用をとおして、どのように作品を解釈するのか、そのプロセスを明らかにする。その際に、キャプションや、展示解説の役割についても検討する。こうした考察をふまえ、美術館の企画展が、震災で被災した人たちにとってどのような役割を果たしているのかを実証的に明らかにする。それは、震災からの復興における美術館のもつ可能性を明らかにすることである。

## 3. 研究の方法

(1) 被験者は大学生47名である。仙台市博物館(歴史・美術系)で開催された「東日本大震災復興支援 若冲が来てくれました：プライスコレクション 江戸絵画の美と生命」(以下、「若冲展」という)の特別展の見学をしてもらうことによって実施された。したがって、本調査ではだれが、なぜ、博物館に来るのか、という問いは基本的にコントロールされている。

(2) 実験は、見学前後に質問する、フロント・エンドモデルの研究の形式をとり、以下のような手順で実施された。

見学前に博物館体験の有無、博物館にもっているイメージを記述してもらう。

「若冲展」の見学は、学生の半数ずつのグループに分け、Aグループは見学前に学芸員による「若冲展」に出品されている作品をみるポイントを解説してもらう。Bグループは、直接展示を見学するように誘導した。

見学後、全ての来館者＝学生にアンケートを実施した。主な項目は、もっとも印象に残った作品、「若冲展」のメッセージ、「鳥獣花木図屏風」の印象、見学後の博物館イメージなどである。

見学後のアンケートの課題に答えてくれた学生44人(A:25人、B:19人)が分析の対象である。

(3) 来館者である学生のレポートの記述を、見学前と見学後とを関係させながら Maxqda により語りを分節化し、その意味について分析をすすめた。その際に、博物館の経験の有無、見学前の解説の有無等に分けてそれぞれのグループの違いに注目し分析をおこなった。

来館者は、どの作品に、なぜ強い印象をもつのだろうか。

来館者の見学において、キャプションや事前の学芸員による解説がどのような影響をもつのだろうか。

「若冲展」の企画・展示に込められた意図は、来館者にどのくらい伝わっているのだろうか。

「鳥獣花木図屏風」をどのように理解したのだろうか。来館者はどのような「解釈戦略」(interpretive strategies)をとって博物館経験を説明したのか。

博物館のイメージは、博物館経験によってどのように変化するだろうか。

これらの問いに答える形で結果をまとめてきた。

#### 4. 研究成果

この研究は、博物館の来館者研究の試論的な研究であり、博物館経験を見る視点も実証の方法も初歩的な試みである。それでも成人の学習研究としていくつかの重要な知見がえられた。

(1) 来館者たちは、若冲の企画展において、どのような解釈戦略をとっていたであろうか。この研究では、「ビジュアルな質」の側面である「色彩」、「構成」、そして「空間」に来館者たちはまず着目することを明らかにしてきた。日本画においては、この「構成」や「空間」の作り方が大きな意味を持っている。とくに、白と黒、大小、穏やかさと荒々しさの対比などが、観る者に視覚的に強い印象を焼き付ける力となっている。「製作過程における技術・技能」も影響を与える要素である。しかしながら、それで終わるわけではない。来館者たちは、作品をじっくりと眺めながら「生命の躍動感」や、描かれている主題から固有の感情をつくりだしていく。その際に、来館者一人ひとりのアイデンティティに固有の意味をつくりだしていくのである。

(2) キャプションや、学芸員たちによる解説はどのような意味を持つのだろうか。この調査からは、キャプションや解説は、「技法の理解」や「作品の時代的背景の理解」を助け、かつ、「解釈の枠組み」を提供していると受け取られているが、しかし、来館者たちは、それを単純に受容するのではなく、作品等から感じられる意味と、これらの情報の意味を照らし合わせながら、自分たち固有の経験の意味をつくりあげていること。そのプロセスという点では、視覚的な情報から制作過程に関する認知的な知識を加え、鑑賞をとおして感じられる自分なりの感覚とを総合するという手順をたどりながら理解をつくっている。

(3) 今回の企画展は、被災者たちの震災からの復興への意思形成にとって、どのような意義があったのだろうか。地震と津波で家族、友人、知人を失った被災者たちにとって、この企画展からえたメッセージは、「生命の躍動」、「生きることへの肯定」である。くり返しになるが、この絵から読み取る感覚は、被災の経験と結びつけられて意味が構成されている。つまり、ここが大切な点であるが、作品の理解とは、identity-related な解釈といってよいだろう。プライス夫妻も、学芸員たちも、こうした芸術のもっている復興を支援する力に期待していたに違いない。そして、この意図は、見事に果たされたといってよいだろう。

(4) 博物館への来館は、すでに構築されてきた既存の博物館の意味により規定される。例えば、「退屈なところ」という意味が付与されれば、その来館者は自ら博物館を訪れることはない。しかし、新たな博物館経験をとおして、これも新たな経験の意味として再構築される。その際に、作品などについての知識など認知的な学習よりも、心動かされる感動体験が重要な意味をもつ。本来、美術鑑賞は、すぐれて個人的な事柄である。絵画の鑑賞からえられる意味も、個別性を特徴とする。しかし、この企画展では、作品、展覧会全体から伝えられるメッセージが来館者の内省にまで届くことにより、一つの「解釈のコミュニティ」に包み込まれる感覚が生まれる。若冲作品のもつ世界観、このコミュニティに包み込まれているという感覚こそが、この企画展を成功に導く鍵なのである。

(5) しかし、博物館における来館者の学習のプロセスの解明という点では、今回は、フロント・エンドモデルの初歩的な調査であった。来館者同士(友人同士、親子など)あるいは来館者と学芸員などとの相互作用をより詳細に分析する必要がある。方法としても、ヒヤリング調査によるデータ収集と、その解釈学的現象学による分析、社会学の会話分析や映像の分析などの手法が必要となるだろう。それらは今後の課題である。

#### 参考・引用文献

1. Dierking, Lyann, John Falk, 2005, *Using the Contextual Model of Learning to Understand Visitor Learning from a Science Center Exhibition*, Wiley InterScience (www.interscience.wiley.com), publishes online 18 July 2005.
2. Falk, John, and Lynn D. Dierking, 2000, *Learning from Museums; Visitor Experiences*

*and the Making of Meaning*, AltaMira Press.

3. Falk, John, and Lynn D. Dierking, 2013, *The Museum Revisited*, Left Coast Press.
4. Falk, John, Leslie M. Adelman, 2003, Investigating the Impact of Prior Knowledge and Interest on Aquarium Visitor Learning, *Journal of Research in Science Teaching*, Vol. 40, No.2, pp.163-176.
5. Falk, John, 2011, Contextualizing Falk's Identity-Related Visitor Motivation Model, *Visitor Studies*, 14:2, pp.141-157.
6. Hein, George, 1998, *Learning in the Museum*, Routledge.
7. Hooper-Greenhill, E., (ed), 1999, *The Educational Role of the Museum*, Routledge.
8. Hooper-Greenhill, E., 1994=2000, *Museums and their Visitors*, Routledge.
9. Hooper-Greenhill, E., 2000, *Museum and the Interpretation of Visual Culture*, Routledge.
10. Hooper-Greenhill, E., 1996=2000, *Museum and their Visitor*, Routledge.
11. Hooper-Greenhill, E., et al, 2001, *Making Meaning in Art Museums 1: Visitors' Interpretative Strategies at Wolverhampton Art Gallery*, RCMG, University of Leicester.
12. Hooper-Greenhill, E., et al, 2001, *Making Meaning in Art Museums 2: Visitors' Interpretative Strategies at Nottingham Castle Museum and Art Gallery*, RCMG, University of Leicester.
13. Mitsuru, Takahashi & Makiishi Takikom(unpubulished), Earthquake and tsunami disaster and the potential of art education: The significance of holistic learning.

## 5 . 主な発表論文等

[雑誌論文](計 3 件)

**Exploring the Role of Art Museum for the Recovery from Disaster: The Potential of Museum Experience.[5th International Multidisciplinary Scientific Conference on Social Science and Arts SGEM,6(3),(2018),255-268] TAKAHASHI Mitsuru, peer reviewed**

**Earthquake Disaster and the Potential of Adult Art Education: The Significance of Holistic Learning.[5th International Multidisciplinary Scientific Conference on Social Science and Arts SGEM,6(3),(2018),133-143] TAKAHASHI Mitsuru, peer reviewed**

**The Role of Community Learning Center to Promote ESD.[1 st International Conference of Educational Sciences,1,(2017),963-966]Sodikin, Yanti Shantini and Takahashi Mitsuru ,peer reviewed**

[学会発表](計 2 件)

**Exploring the Role of Art Museum for the Recovery from Disaster: The Potential of Museum Experience.[5th International Multidisciplinary Scientific Conference on Social Science and Arts SGEM,(2018),TAKAHASHI Mitsuru**

**Earthquake Disaster and the Potential of Adult Art Education:The Significance of Holistic Learning.[5th International Multidisciplinary Scientific Conference on Social Science and Arts ,(2018),TAKAHASHI Mitsuru.**

[図書](計 1 件)

成人教育の社会学.[東信堂,(2017)]高橋満編著、総ページ数 329 ページ、松本大、槇石多希子、丸山里奈ほか、高橋満担当部分 ~ 、3~18、39~53、54~74、76~93、121~145、167~189、190~233、319~320。

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。